韓国における科学小説の受容

——ジュール・ヴェルヌ作、李海潮訳
『科学小説鉄世界』の啓蒙性と科学的想像力を中心に

Hyosun KIM (金孝順 : Professor of Korea University)

✉ uzzanzi@korea.ac.kr

(韓国) 高麗大学グローバル日本研究院教授。筑波大学で2005年「芥川龍之介の文化観」で博士号取得。最近は朝鮮伝統文芸物の日本語翻訳や朝鮮総督府の機関紙『京城日報』の文学を研究。主な研究としては編著『東アジアの日本語文学と文化の翻訳・翻訳の文化』(ソウル: 亦楽, 2018)、訳書に『懸賞小説潮鳴る半島・半島の自然と人間』『京城日報』文学・文化叢書1(ソウル: 亦楽, 2020)、論文「『京城日報』における日本語文学と近代都市京城の表象—横光利一の「純粹小説論」と「天使」を中心に—」(『日本研究』ソウル: 高麗大学校グローバル日本研究院, 2020)、「エミレ・ゾラ伝説の日本語翻訳と植民地時期における戯曲の政治性」(『日本言語文化』ソウル: 韓国日本言語文化学会, 2016)など。

The Introduction of Science Fiction to Korea

: The Undercutting of Enlightenment and the Scientific Imagination in
The Iron World : a Science Fiction Novel, a translation of Jules Verne's novel by Lee Haejo

The Iron World : a Science-Fiction Novel, Lee Haejo's translation of *Les Cinq Cents Millions de la Bégum* by Jules Verne, is one of the first complete Korean translations of a full-length science fiction text, and it exemplifies how science fiction novels were first introduced to Korea. Jules Verne was a pioneer of the modern genre of science fiction, his work characterized by narratives that dealt with scientific theories and forms of knowledge that provoke the scientific imagination. *Les Cinq Cents Millions de la Bégum* is no exception, and Lee Haejo based his translation on Morita Shiken's translation, *The Iron World*, which kept the original's typical science fiction elements largely intact. However, Lee's translation highlights the conflict between Germany and France during the period in which the novel is set, transforming the work into an enlightenment novel that promotes patriotism. The characters are presented within the stereotypical framework of good and evil, and there are noticeably more subjective and emotional depictions of the surrounding environment. As a result, the translation obscures the essence of science fiction, which stimulates the scientific imagination through its focus on scientific theories and knowledge. This limitation can be interpreted as stemming from the vagaries of the Korean literary scene of the time rather than from the instincts of Lee Haejo. In fact, the limited vision of the Korean literary milieu led to the near absence of original science fiction in Korea before the 1960s.

Keywords Science Fiction(科学小説), Jules Verne(ジュール・ヴェルヌ), Lee Haejo(李海潮), Morita Shiken(森田思軒), *Les Cinq Cents Millions de la Bégum*(『鉄世界』)

1 はじめに：科学の発達と科学小説への関心

現代社会は、最近アルファ碁(AlphaGo)の登場が人類に与えた大きい衝撃から分かるように、デジタル時代、情報化社会、四次革命の時代などで特徴づけられる。これにより、人間と科学、人間と機械・人工知能の差異、その機能や役割など多くの問題が多様な領域から問われており、そのような流れの中で科学小説への関心も高まっている。科学小説にあたるサイエンス・フィクション(Science Fiction)という用語はヒューゴー・ガーンズバック(Hugo Gernsback、1884~1967)が『サイエンス・ワンダー・ストーリーズ(Science Wonder Stories)』(1926.6)で使ったのが最初で、「科学小説」という用語そのものはジュール・ヴェルヌ(Jules Verne、1828~1905)作・森田思軒(1861~1897)述訳の『鉄世界』(東京：集成社、1887.9)を中国語で翻訳した包天笑(1876~1973)の『科学小説鉄世界』(1903)で初めて使われた。また、それを韓国語に翻訳した李海潮(1869~1927)も『科学小説鉄世界』(1908)でそのまま使っている。

このような科学小説の本質は、近代以降発達された科学知識と理論に基づいて人間の想像の世界を具現してみせる所にあると言える。それから、その中で取り扱われている問題は、究極的には人間とは何かという実存的で哲学的問題に帰結されるが、具体的には科学と機械、産業、環境、衛生、戦争、民族、国家、ジェンダーなど多様である。このような科学小説の起源はどこにあるかという問題は科学小説の概念をどのように捉えるかにより幅広い異見がある。例えば、近代以前の科学小説の起源をトーマス・モアの『ユートピア』(1516)と見なしたり、メアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』(1818)と見なしたりしている。しかし、本格的近代科学小説の出発については、『地底旅行』(1864)、『月世界旅行』(1865)、『海底2万里』(1869-70)、『80日間の世界一週』(1872)、『王妃の5億フラン』(1879)など、緻密な科学的知識、理論に基づき飛行機、潜水艦、宇宙船、人工衛星、弾道ミサイル、画像会議などを想像して具現した数多くの作品を発表したジュール・ウェルヌを取り上げるのには異見がない。

上記のような科学小説は、西欧文明を受容することによって富国強兵と近代国家形成に尽力した東アジア三国においても、近代以後関心の的となった。周知のように、日本は東アジア三国の中で一番早く西欧文明を受容して近代化に成功し、それに次いで中国と韓国は日本を経る形で西欧文明を受容することになる。このような流れは、ジュール・ウェルヌ、H・G・ウェルズ(1866~1946)、カレル・チャペック(1890~1938)などのを初めとする科学小説の受容においても同じ様相を見せている。ところが数多くの科学小説の中で東アジアで一番早く一番積極的に翻訳・受容されたのはジュール・ウェルヌであった。それから東アジアで西欧文明の受容の様相が各々の国の処した状況により異なるように、ジュール・ウェルヌを中心とする科学小説の受容も国ごとに異なる様相を帯び、その違いにより各々の国における科学小説の行方が分かれるようになる。

このような問題意識で、本論文では韓国におけるジュール・ウェルヌの翻訳受容の

様相を『王妃の5億フラン(Les Cinq Cents Millions de la Bégum)』(1879)の翻訳である李海潮訳の『科学小説鉄世界』(1907)中心に検討し、近代初期の韓国における科学小説の翻訳・受容の特殊性と以後の科学小説の展開の様相を関連づけて論じてみる。

2 近代初期韓国における科学小説の受容

1945年以前、韓国で翻訳された科学小説は、【表1】のようにジュール・ヴェルヌとH. G. ウェルズを初めとする5人ぐらいの作家の8編に過ぎない。その上、韓国語訳の8編の中で、①、②、③、⑥の4篇、すなわち半分がジュール・ヴェルヌの作品である。同じ期間日本と中国においては、【表2】のジュール・ヴェルヌの作品だけを見てもはるか多くの作品が翻訳されており、対照的な様相を帯びているが、ジュール・ヴェルヌの作品の比重が大きいという点では同じ流れを見せている。

【表1】1945年以前科学小説の韓国語訳

原作	韓国語訳
ジュール・ヴェルヌ著『海底二万理(Vingt Mille Lieues sous les Mers)』(1869-70)	①「海底旅行奇談」(『太極学報』8～21、太極学会、1907。途中3回休載。朴容喜[1～5回]/自楽堂[6～8回]/冒険生[9～11回])
ジュール・ヴェルヌ著『王妃の5億フラン(Les Cinq Cents Millions de la Bégum)』(1879)	②李海潮訳述『科学小説鉄世界』(匯東書館、1908)
ジュール・ヴェルヌ著『氣球に乗って5週間(Cinq Semaines en Ballon)』(1863)	③金教濟翻案『科学小説飛行船』(東洋書院、1912)
ロバート・ルイス・スティーヴンソン著『ジキル博士とハイド氏の奇妙な事件(The Strange Case of Dr. Jekyll and Mr. Hyde)』(1886)	④元杜尤(=Horace Grant Underwood)翻訳『ジキル博士とハイド』(朝鮮耶蘇教会、1921)
	⑤奇一(=James Scarth Gale)・李ウォンモ共訳『一身兩人記』(朝鮮耶蘇教会、1921)
ジュール・ヴェルヌ著『地球から月まで(De La Terre a La Lune)』(1865)・『月の周り(Autour de la Lune)』(1870)	⑥辛泰嶽翻訳『月世界旅行』(博文書簡、1924)
カレル・チャペック著『R.U.R.』(1920)	⑦朴英熙翻訳「人造労働者」(開闢社『開闢』56～59号、1925.2-5)
H.G.ウェルズ著『タイム・マシン(The Time Machine)』(1895)	⑧影洲生翻訳『八十万年後の社会』(『別乾坤』1号、1926)

【表2】1945年以前ジュールス・ウェルヌ作品の日本語・中国語訳¹

ジュールス・ウェルヌの原作	日本語・中国語訳
『気球に乗って5週間 (Cinq Semaines en Ballon)』(1863)	日本：井上勤『亜非利加内地三十五日間空中旅行』（絵入自由出版社, 1883-1884）
	中国：翻訳者未詳『空中旅行記』（江蘇出版社, 1903）
『地球中心への旅行 (Voyage au Centre de la Terre)』(1864)	日本：三木愛花・高須治助訳『拍案驚奇地底旅行』（九春社, 1885.2）
	中国：之江索士訳『地底旅行』（折江潮, 1903-04, 啓新書社・普及書局, 1906）
『地球から月まで (De La Terre a La Lune)』(1865)	日本：井上勤訳『九十七時二十分間月世界旅行』（黒瀬勉二[ほか], 1880-81） 天馬楼主人訳『月世界旅行記』（文禄堂, 1908.3）
	中国：魯迅訳『月界旅行（從地球至月球）』（進化社, 1903. 10）
『月の周り (Autour de la Lune)』(1870)	日本：井上勤訳『月世界一周』（博聞社, 1883）
	中国：周桂笙訳『環游月球』（公智書局, 1905）
『海底二万里 (Vingt Mille Lieues sous les Mers)』(1869-70)	日本：鈴木梅太郎『二万里海底旅行』（出版不明, 1880） 大平三次重『海底旅行：五大洲中』（四通社, 1884） 井上勤訳『六万英里海底旅行』（博聞社, 1884）
	中国：戸籍東・紅溪生訳『海底旅行（海底兩万里）』（新小説社, 1902）
『浮かんでいる都市 (Une Ville Flottante)』(1870)	日本：森田思軒訳『大東号航海日記』（民友社, 1888）
『八十日間の世界一周 (Le tour du monde en quatre-vingt jours)』(1873)	日本：川島忠之介訳『八十日世界一週』（私家版, 1878） 井上勤訳『通俗八十日間世界一周』（自由閣, 1888）
	中国：薛紹微・陳寿澎共訳『八十日環游記（八十天環游地球）』（世文社, 1900）
『不思議な島 (L'île Mystérieuse)』(1874)	日本：古茅庵流水訳『絶島秘事』（1898）
	中国：溪若『秘密海島』（小説林社, 1905.4）
『王妃の5億フラン (Les Cinq Cents Millions de la Béguine)』(1879)	日本：紅芍園主人訳「仏曼二学士の譚」（『郵便報知新聞』1887.3.26-5.10.4） 森田文蔵訳述『鉄世界』（集成社, 1887.9）
	中国：包天笑訳『科学小説鉄世界』（文明書局, 1903）
『二年間の休暇 ((Deux Ans de vacances))』(1888)	日本：森田思軒訳『十五少年』（博文館, 1896）
	中国：梁啓超・羅晉『十五小豪傑』（新民叢報, 1902）

¹ この表は金鍾郁『韓国現代文学と境界の想像力』（亦楽, 2012）, pp.239-240を引用したものであるが、一部書誌事項の誤謬や誤字は加筆訂正を施した。

このようなジュール・ヴェルヌの作品の中で、①「海底旅行奇談」は、上述の書誌事項からも分かるように、第11回で連載が中止され、完訳に至らないで終わってしまう。それに比べ、②李海潮訳述『科学小説鉄世界』は森田文蔵(=思軒)訳述『鉄世界』を翻訳した重訳の形を取ってはいるが、完訳をしているという点で注目に値する。すなわち、②李海潮訳述『科学小説鉄世界』は韓国における最初のジュール・ヴェルヌの完訳であると同時に、最初の科学小説の完訳である訳である。したがって、②李海潮訳述『科学小説鉄世界』の翻訳・受容の様相を検討するのは、韓国における最初のジュール・ヴェルヌの翻訳・受容の様相を論じると同時に、韓国における科学小説の帰趣を問うことにもなると言えよう。

李海潮訳述『科学小説鉄世界』の原作は、ジュール・ヴェルヌの『王妃の5億フラン(*Les Cinq Cents Millions de la Béguin*)』(1879)であるが、これはフランス語から直接翻訳したのではない。このような事情で今までの先行研究は翻訳の過程を明らかにするのに集中されてきた。その結果、フランス語：Jules Verne『*Les Cinq Cents Millions de la Béguin*』(1879)→²英語：William Henry Giles Kingston『*The Begum's Fortune*』(1879)→日本語：森田文蔵(=思軒)訳述『鉄世界』(集成社, 1887.9)→中国語：包天笑訳『科学小説鉄世界』(1903)→³韓国語：李海潮『科学小説鉄世界』(1908)の過程を経て翻訳されたことが明らかにされた。このような翻訳の過程から、近代初期東アジアにおける西洋の文学・文明の翻訳は個別国家の言語に翻訳されたというよりは、まさに、漢字・漢文という共同の書記体系に基づいた共同の文化行為としてなされたということが分かる。

その一方、李海潮訳述の『科学小説鉄世界』の研究の内容を見ると、「ドイツの軍国主義を象徴する鍊鉄村は日本帝国主義と繋がり、フランスの長寿村は日帝に対抗する朝鮮と捉えられる」⁴とのように、ラテン人種とゲルマン人種との対立を日本帝国主義の侵略によって国権を喪失される危機に処した朝鮮と日本の対立と捉え、愛国啓蒙書と解釈するのが一般的である。このような解釈は、1910年の総督府の販禁処置⁵からみると、ある

² 陳宏淑は、日本語訳が英語訳から翻訳されたことをテキストの分析を通じて明らかにし、森田の日本語訳から中国語に翻訳した包天笑の『科学小説鉄世界』(1903)の文体の特徴を分析している。陳宏淑の研究によると、森田思軒が1887年に日本語訳を出版する前にあった英訳本はWilliam Henry Giles Kingstonの*The Begum's Fortune*(London: Sampson Low, 1879)と訳者不明の*The 500 Millions of Begum*(New York: George Munro, 1879)の二種があるが、登場人物の表記を見るとロンドン版から翻訳したことが分かるという。(陳宏淑「ジュール・ヴェルヌから包天笑まで—『鉄世界』の重訳史—」金孝順編『東アジアの日本語文学と文化の翻訳、翻訳の文化』(亦楽, 2018)参照)。

³ 李海潮の『科学小説鉄世界』(1908)の翻訳の経緯については、金並鉄や(『韓国近代翻訳文学史研究』乙酉文化社, 1975)、李龍男(『李海潮と彼の作品世界』東星社, 1987)によって森田思軒の日本語訳から翻訳されたと指摘されたことがあるが、以後の研究(例えば崔元植「李海潮文学研究」『韓国近代小説史論』創作と批評社, 1994)では包天笑の中国語訳から翻訳されたことが明らかにされた。

⁴ 金在國「韓国科学小説の現況(한국 과학소설의 현황)」(大衆文学研究会編『科学小説とは何か(과학소설이란 무엇인가?)』国学資料院, 2000), p.97.

⁵ 1910年の韓日合併以後、李海潮の作品は三篇が禁書処置に処されるが、対話体の討論形式で愛国啓蒙期の一番正論的性格を持つ『自由鐘』とアメリカの独立英雄のワシントンの伝記の翻訳である『華城頓伝』、それから『科学小説鉄世界』がそれに当たる。(유철상「번역을 통한 '자미'와 '영향'의 재창조—이해조의 『鉄世界』를—」『한국 개화기소설 연구』서울: 태학사, 2000, p.217参照)

程度は事実として認めざるを得ない。それと同時に「当時の大韓帝国の劣悪な科学状況を念頭に置いて科学思想を啓蒙する作品」⁶として選択され翻訳されたという意見もある。しかし、その解釈の根拠はどこにあるかとなると、日本語訳と中国語訳との章の題目の比較を通じて推論したり李海潮の翻訳だけを分析するに止まり、肝心の、韓国語と中国語の共通の原本である日本語訳との比較検討までには至らないでいる。創作の主体としての翻訳家の創意は原本に何を加えるかあるいは原本から何を切り落とすかによって表れると言える。

このような点から考えてみると、韓国語訳は愛国啓蒙の内容が追加されたのにも関わらず、分量から見ると日本語訳に比べると半分ぐらいに縮んでいるという事実は注目に値する。韓国語に訳する際、何が追加され何が削除されたのであろうか。翻訳者の創意はどこにあるのだろうか。今までの研究は韓国語訳『科学小説鉄世界』の性格や意味合いを検討するにあたって、新しく加えたり変えたりした行為にだけ注目しており、半分ぐらいの内容が捨象された事実には注目したことがない。このような問題意識で、以下では李海潮が『科学小説鉄世界』を翻訳するにあたり、捨象してしまったところは何か、その捨象行為は『科学小説鉄世界』の意味合いにどのような変化をもたらしたか、などを検討してみる。

3 ジュール・ウェルヌの作品世界と東アジアにおける 『王妃の5億フラン』の翻訳

3-1 ジュール・ウェルヌの作品世界と森田思軒の『鉄世界』における人種論

ジュール・ウェルヌは、上述したように、『地底旅行』、『80日間の世界一週』、『月世界旅行』、『海底2万里』、『王妃の5億フラン』などで緻密な科学的知識や理論に基づいた奇抜的想像力を発揮し、飛行機、潜水艦、宇宙船、人工衛星、弾道ミサイル、海上都市、TV、透明人間、画像会議などを見せてくれることによって、科学小説の先駆けとして評価されている。このような評価は奇抜的想像力で単に予言的概念を最初に具現したのみならず、そのような想像の世界を緻密な科学的知識や理論に基づいて描いたことに因ると言える。例えば、『80日間の世界一週』はイギリス人資産家フィリアス・フォッグが執事のパスパルトゥーを従えて、世界を80日間で一周しようと試みる波瀾万丈の物語であるが、ストーリーを導く推進力は当時新しく開発された鉄道や蒸気船などの交通機関の速度や地理、気候や日付変更線などの科学的知識に基づく緻密な計算にある。それで、この作品の主人公フォッグは、ひげそりに使うお湯の温度を華氏で2度間違えた執事を解雇してしまい、新たに規則正しい生活を望んでいるフランス人のパスパルトゥー

⁶ 金在國「鉄世界の科学小説の性格」(大衆文学研究会編『科学小説とは何か(과학소설이란 무엇인가?)』国学資料院, 2000), p.136.

を雇うような、機械的で正確な人物として造形されている。井上勤が『気球に乗って5週間(Cinq Semaines en Ballon)』を『亜非利加内地三十五日間空中旅行』という題目に、また『地球から月まで(De La Terre a La Lune)』を『九十七時二十分間月世界旅行』という題目に翻訳したのは、科学小説家としてのジュール・ヴェルヌの面目を、そのような緻密な科学的知識や理論、数学的計算に基づきストーリーを展開するにあると捉えたからであろう。すなわち、ジュール・ヴェルヌを近代化学小説家たらしめたのは、まるで科学教科書みたいな豊富な科学知識を自由自在に活用し人間の想像力を心行くまで発揮して見せたことにあると言える。しかし、その一方単純すぎて図式的叙事や人物の心理、あるいは科学の進歩への楽観的展望、科学の発達による環境破壊や貧富格差、帝国主義などの問題には相対的に鈍感で、通俗的だという批判も受けている。

『王妃の5億フラン』は、そのような批判を意識してか、ヴェルヌ特有の科学的理論や知識による事實的叙述態度を維持しながらも、普仏戦争(1870-71)を背景にフランスとドイツの民族問題を扱うことによって転換点となったという評価を受けている作品である。ストーリーはインド王妃の莫大な遺産を二人の科学者が相続するところから始まる。インド王妃と結婚したジャンジャク・ランゼボールの女兄弟の孫二人に遺産5億フランを分けて2億5千万フランずつ相続することになるのである。一人はフランスのサラザン(=佐善[サラゼン])⁷医学博士で、彼は人類の平和と幸福を願い、近代科学の粋を集めた理想都市、フランスビル(=長寿村)を建設しようとする。もう一人はドイツ人のシュルツ(=忍毘[ニヒト])化学士で、彼は現在はアングロサクソン人種(ゲルマン族)が繁盛しラテン人種は衰弱しているのに、サラザンがラテン人種のためにフランスビルを建設しようとするのは造物主の意に悖ることと思う。それで、シュタールシュタート(=鋼鉄都市)を築き、鉄を精練してはフランスビルを絶滅させる計画を立てる。シュタールシュタートに潜入捜査のため潜り込んだマルセル(=馬克[マクス])は、その秘密を嗅ぎ付け、脱出に成功し、その計画をサラザンに知らせ対策を図らせる。シュルツは新開発の超大型砲弾を約48kmも離れているサラザンの理想都市フランスビルを目掛けて発射する。しかし、時間計算を間違え失敗し、結局は自分で開発していた砲弾の毒ガスの漏出で凍死する。これがあらすじである。

このように、本作品は基本的にフランスの医学博士サラザンのフランスビルとドイツの化学士シュルツ化学士のシュタールシュタートとの対立を通じて、フランスとドイツの民族対立という構図を取っている。しかし、人物描写や叙事構造には相変わらず飛躍や図式的要素が目立つ。例えば、シュルツ博士がサラザン医学士のフランスビルを破壊しようとする理由は、以下のように曖昧である。

進歩の法則はラティン族が衰退しサクソン族に屈服し、最後には地球上から完全に消滅することを予言している。教授の感覚によると、サラザン博士の計画は、こ

⁷ ()の中は森田思軒の『鉄世界』の固有名詞。以下同じ。

の進歩の法則に悖るので、必ず失敗するしかない。しかし、万が一にも博士の計画が実現される端緒を得て成功する可能性があるとするれば、このような予測も覆られる恐れがある。すべてのサクソン人に一般的秩序を守るという意味においても不可避な法則に従うためにも、できる限りそのような狂的計画は埋葬してしまう必要がある。このような状況下でエナ大学の化学教授でほかの人種に関する多くの比較研究—その研究ではゲルマン族が他の民族を吸収しなければならない当為性が証明されている。—で有名な彼が大自然の創造と破壊を繰り返す偉大な力で自然に反抗する小人たちを絶滅させることを命じられたのは確かである⁸。

シュルツ博士がフランスビルを破壊しようとする計画は作品全体の構図を支える一番重要なモチーフであるのにも関わらず、ただ「ゲルマン族が他の民族を吸収しなければならない当為性が証明されている」と曖昧に提示されているだけで、その「当為性」の根拠は提示されていない。また、サラザンの息子(=乙透[オクターブ])の友達マルセルとサラザンの娘のザンとの恋愛のモチーフも全体の構成に溶け込んでいないで、蛇足のようになっている。

森田思軒はこのような構成上の問題を見破り、マルセルとザンの恋愛は「至て淡白にして有るも無きも少しも本題に関係なき程の筋なれば」「一切これを削除し」息子乙透も「長寿村の防御委員として点出」⁹すると表明し、【表3】のようにフランス語の「2. 二人の友達」、「19. 家庭で起こった事件」、「20. 結び」を省略したり、「11. サラザン博士宅での晩餐」・「12. 市議会」、「13. マルセル・ブルクマンがシュタールシュタートに」・「14. 戦闘の準備」、「17.最後の決戦」・「18.核心の中の核心」を合わせて一つの章にしたりするなど、全20章を15章に縮約する。このような変更によって作品はより緊張感のあるしっかりした構成をとるようになる。

【表3】『鉄世界』の言語別翻訳の章の題目

完訳金碩禧訳(ソウル：ヨリムウォン, 2005)	森田思軒訳(東京：集成社, 1887.9)	包天笑(上海：文明書局, 1903)	李海潮(京城：匯東書簡, 1908)
1. シャープ氏の登場	第一回 天来の一億五百万円	第一章 天外飛来之一億五百万圓	第一章 天から飛んできた一億五百万ウォン
2. 二人の友達	省略	省略	省略
3. 新聞記事	第二回 馬克貌刺万 第三回 第三回『余は決して一たび定めたる時を 変せず／余は決して一たび命したる詞を再 せず』	第2章 理想之長寿村 第3章 日耳曼森林中躍出之怪物	第2章 長寿村理想 第3章 日耳曼森林中から怪物一匹の怪物飛出す

⁸ 金碩禧訳『インド王妃の遺産』(ソウル：ヨリムウォン, 2005), p.67. この金碩禧訳はフランス語で直接翻訳した完訳で、以下、フランス語原作はこの金碩禧訳に従う。

⁹ 森田文蔵(=思軒)訳述『鉄世界』(集成社, 1887.9), 「凡例三則」。

完訳金碩禧訳(ソウル：ヨリムウォン, 2005)	森田思軒述訳(東京：集成社, 1887.9)	包天笑(上海：文明書局, 1903)	李海潮(京城：匯東書簡, 1908)
4. 等しく分かつ	第四回 薩遜人種羅甸人種	第4章 撤薩遜人種與羅甸人種	第4章 薩遜人種羅甸人種
5. 鋼鉄都市	第五回 鍊鉄村	第5章 嗚呼鉄血主義之鍊鉄村	第5章 鉄に血する主義で鍊鉄村を建設する
6. アルブルヒト坑	第六回 炭酸瓦斯の淵	第6章 炭酸瓦斯の淵	第6章 炭酸瓦斯の海
7. 中央区画	第七回 中央区	第7章 中央区	第7章 中央区
8. 龍の洞穴	第八回 最早汝は此世に於いて他に為すへき事あらず唯大尋常に死に就くの一事あるのみ	第8章 知我秘事者死忍毗之律令也	第8章 秘密を知ると殺すインビの律令なり
9. 別れの挨拶	第九回 煙草	第9章 女兒花	第9章 女兒花の不思議な効果
10. ドイツ雑誌に載せられた記事	第十回 長寿村の結構仕組	第10章 長寿村之組織	第10章 長寿村の組織
11. サラザン博士宅での晚餐 12. 市議会	第十一回 紐育ヘラルドの警報	第11章 村民總會	第11章 村民の總會
13. マルセル・ブルクマンがシュタールシュタートに 14. 戦闘の準備	第十二回 一発の砲丸に答ふる一片の手紙	第12章 百万金之大砲答以一紙之手書	第12章 百万ウォンの大砲を手紙一枚で返す
15. サンフランシスコ証券取引所	第十三回 桑港の共同相場会場	第13章 桑港市会場之電報	第13章 桑港市会場の電報
16. 二人のフランス人と一つの都市	第十四回 侵入搜索	第14章 如石像如木偶如泥塑之忍毗	第14章 草偶人の如き、仏の如き、彌勒の如き忍毗
17. 最後の決戦 18. 核心の中の核心	第十五回 復命	第15章 長寿村万歳	第15章 長寿村万歳
19. 家庭で起こった事件 20. 結び	省略	省略	省略

しかし、インド王妃の遺産5億フランを分けて2億5千フランずつ相続したフランス医学士佐善の長寿村とドイツの化学士忍毘の鍊鉄村との対立という、主な叙事構造はそのまま維持しているし、科学的理論や知識に基づいてストーリーを導いていくウエルズンの科学小説の本質的特徴も充実に翻訳している。それだけではなく仁毘(＝シュルツ)が長寿村を破壊しようとする理由については、3頁に渡って、詳しい人種論を展開することによって原文における曖昧さを補完している。仁毘の人種論の要点は以下のようであ

る。「今日世界の大勢を見るに羅甸人種(仏国始め伊太利、西班牙、白耳義等の諸国は原一にして之を羅甸人種と称するなり)は日に衰え、薩遜人種(日耳曼始め瑞典、諾威及び英国等は又た其人種原一にして之を薩遜人種と称するなり)は日に盛なるの有様なり」と前提し、「古へ文明の華を聚めし伊太利は久しく雌伏して空しく名所古跡を留むるにすぎず」、「航海の術を以て名を世界に著らはしたる西班牙は旗章の影海上に稀にして閣龍(コロンブス)と共に大西洋を横切りたる雄夫の兒孫今ま復た安にかある」¹⁰とのように具体的例を挙げている。それから、「若し此の如くにして更に幾世幾代を経なば」「権力は羅甸人種の手より落ち去れること乃ち必然の事実」であり、「その権力を失ひたる人種は次第に消滅して他の権力を得たる人種の為めに代はらるるは亦た天地の大法」であるのに、「佐善は此の天地の大法に悖り世界の大勢に逆らひ羅甸人種の男女をして延命せしんと欲し」、「愚かなる渠が長寿村」を建設し「人の長寿すへきは造物主の意なるが故其の造物主之意を奉し長寿の道を図らん」とすると述べる。しかし、「造物主の意は薩遜人種をして益々蕃衍せしめ羅甸人種をして転々消滅せしめ遂には此の世界を挙げて薩遜人種の有と為すに在る」と主張する。それからその根拠として、「仏国か不世出の雄と詫りし羅甸人種第一の豪傑那翁叔姪も一は向きに英国の為に虜とせられ一は頃ろ我か曼国のために囚はれ前後相尋ねて皆薩遜人種の奴」であり、「魯国」の「コウサック人種は当に氷雪の中に其身を老ゆへし」「共に中原に齒すへき者にあらず」、「今や陸に在ては我か日耳曼、水に在ては英吉利と世界の覇権は此に定まれり」¹¹と論を広げる。このように 仁毘の人種論は、長々と力を入れて根拠を述べた後、「彼の佐善の悖逆の企を妨げ薩遜人種以外なる人類の根絶やしを為すことに尽力せん」という危言で紹介される。フランス語原本における曖昧なシュルツの人種論よりずっともっともらしい論理を以て、長寿村の攻撃の当為性を主張していることがわかる。

このように森田思軒は、ジュール・ウエルヌ特有の、科学的知識と理論に支えられる事件展開という科学小説的要素を徹底的に維持したばかりではなく、鍊鉄村と長寿村との対立構図を強化し理想的な科学と文明との関係や人種問題については創意を揮って翻訳をしている。

3-2 李海潮の『科学小説鉄世界』と科学的想像力の捨象

包天笑訳『科学小説鉄世界』と李海潮訳『科学小説鉄世界』¹²は、上記の【表3】から分かるように、全体的構成の上では、【森田訳】をそのまま従っている。それにもかかわらず、【李海潮訳】は、「ドイツの軍国主義を象徴する鍊鉄村は日本帝国主義と繋がり、フランスの長寿村は日帝に対抗する朝鮮と捉えられる」とのように、民族意識を高揚し

¹⁰ 上掲書, p.26.

¹¹ 森田思軒訳『鉄世界』(東京: 集成社, 1887.9), pp.27-28.

¹² 以下便宜上、李海潮訳『科学小説鉄世界』は【李海潮訳】に、森田思軒訳『鉄世界』は【森田訳】と称する。

日本帝国主義への批判意識を反映した啓蒙的小説として評価されている。

それでは、【李海潮訳】における民族対決の構図はどのように強化されたのであろうか。それは何よりも、200頁の日本語訳から100頁に縮訳されているにもかかわらず、増加された感情、情景描写から確認できる。まず、その確認のために【森田訳】と【李海潮訳】における人物描写の特徴を比較してみる。その差異は、仁毘が登場し彼の人種論を紹介する第三章の題目と、彼の身体的特徴への描写、それから佐善の描写とを比較すれば、はっきりと見えてくる。

【森田訳】

<仁毘>

第三回、余は決して一たび定めた時を変せず

余は決して一たび命したる詞を再せず

科学士忍毘は打見し所少しく長けたるか如しと雖も尚ほ四十五若くは六七の間なるへし身体偉大にして手足彼の日耳曼人に固有なる角肩は忍毘の肩にいたりて益々著しく額広く口方に歯細かく唇薄くその容貌何となく人をして一見先づ心置きしむる趣きあれとも学士は自ら誇りて其の威厳あるを頼める者のことし¹³

<佐善>

年紀凡そ五十一二歳にもならん歟身材あまり長からず鼻尖かり眼鋭く顔立何となく引締まりて見へたるはまかひもあらぬ仏人にて而かも其の眉目の間に一種言ふ可らさるの愛嬌溢る計りに顯れしは名工の画きたる慈仁家の像を眺むる心地せる¹⁴

【李海潮訳】

<仁毘>

第三章、日耳曼森林中から一匹の怪物飛出す

中部日耳曼ヤリ府、大学教授化学士仁毘という者あるに、身体は絶大で、手足が醜悪である。肩を窄めると一尺あまり聳え、眼を見張ると火が燃え上がるようで、誰もが一度見た日には脳髓に刻焼けつけられて夜になると魘されて眠れないようだ。

데삼장 일이만, 삼림중의서, 괴물하나이, 뛰어나온다

중부일이만야리부, 대학교수, 화학스인비라, 혼자이잇스니, 신테절대하고, 슈죽이쥬악하며, 억기를웃스면, 즈가웃스웃고, 눈을불읍쓰면, 불덩이가, 도논듯하야, 아모스름이던지, 혼번보면, 뢰수에스뭇쳐, 밤이면, 가워눌너, 즈을뭇잔다하논, 위인이라.¹⁵

¹³ 前掲書, p.18.

¹⁴ 森田思軒述訳『鉄世界』(東京：集成社, 1887.9), p.1.

¹⁵ 李海潮訳『科学小説鉄世界』(京城：匯東書簡, 1908), p.12.

<佐善>

年五十余りの紳士、髭は所所白く、偉丈夫で、顔色は穏やかであれば、慈愛心が眉目の間にひそかに見えるので、当代の有名な絵師でもその和気と愛嬌のある顔を描きにくいであろう。

나이, 오십여나된, 신스기수염이, 희끗희끗하고, 곱골이준수하며, 안착이흔후후야, 죽이십이, 미목간에, 은연히계희이니, 당세에, 유명흔, 화공이라도, 그화기와, 익용을 방불히, 그리기어려울니라.¹⁶

まず、章の題目だけ見ても【森田訳】では、仁毘という人物は法則、機械、科学的システムによって働く性格で、日耳曼人に固有なる(=ゲルマン族特有)の生活習慣を具現する人物として造形されていることが分かる。このような人物像は、例えば物事を尋常ではない正確さで行う習慣の持ち主で、前の執事はひげそりに使うお湯の温度を華氏で2度間違えたために解雇されてしまうなど、「イギリスで一番正確な人」として描かれている『80日間の世界一週』のフィリアス・フォッグのような人物像と通じるものであり、これは科学小説家としてのジュール・ヴェルヌ特有の人物像でもある。また、仁毘は身体的にもゲルマン族特有の身体構造を強調し、佐善の仏人(=ラテン人種特有)の身体構造や温和な人柄と対照的に造形されているが、ここに善悪の価値判断は含まれていない。しかし、【李海潮訳】の仁毘は日耳曼特有の生活習慣や身体構造の特性とは関係なく、「醜悪」な「一匹の怪物」として造形され、彼を一目見た人は魔されて眠れないとのように、ごく主観的・感傷的に描かれている。それは佐善の場合も同じで、「仏人」というラテン人種としての性格というよりは、新小説の善悪構図を表す人物で理想的人物として描かれている。それは【森田訳】では佐善の身体的特徴の帰結であった「まかひもあらぬ仏人にて」という表現が、【李海潮訳】では削除されたことから確認できる。

このように【森田訳】における仁毘は佐善というラテン人種と対照的人物として造形されているが、その人物像には法則、機械、科学的システムによって正確に働くという、科学小説家のジュール・ヴェルヌ特有の人物像を見せている。それに反して【李海潮訳】における仁毘は、そのようなジュール・ヴェルヌ特有の科学的システムとは関係なく、主観的・感傷的に勧善懲悪の図式的人物として描かれていると言える。

李海潮の主観的・感傷的描写は人物造形だけではなく、主要局面の情景描写における語り手の感傷の吐露にも表れている。たとえば、作品の冒頭部分を比較してみる。

【森田訳】

「成程是等の新聞は流石に英国中屈指と称せらるるだけありて善くも書きたり。」と独語きつつ卓子の上に一枚のデーリニュースを抛げ出だせるは年紀凡そ五十一二歳にもならん歟身材あまり長からず鼻尖かり眼鏡く顔立何となく引締まりて見へたるはまかひもあらぬ仏人にて而かも其の眉目の間に一種言ふ可らさるの愛嬌溢る

¹⁶ 李海潮訳『科学小説鉄世界』(京城：匯東書簡，1908)，p.12.

計りに顕れしは名工の画きたる慈仁家の像を眺むる心地せる此処は英国のブライトン府のにして此人は仏国の医学士と云ひ此度当ブライトン府にて催せる衛生會議に立合はんか為め此処に逗留なせるなり¹⁷

【李海潮訳】

夕焼は炎々とし万木は鬱蒼たるに、數間斗屋は隠映で、奇花異草が爛漫と庭の前にぎっしりとする。細竹簾は開けてあり、書案は整齊であるが、年五十余りの紳士、髭は所所白く、偉丈夫で、顔色は穏やかであれば、慈愛心が眉目の間にひそかに見えるので、当代の有名な絵師でもその和氣と愛嬌のある顔を描きにくいであろうと。

その紳士は仏国パリーの医学士佐善君であるが、英国ブライトン府に来て衛生のことを研究しており、この家はその紳士の宿食している旅館である。

この時、佐善君が一枚のデーリ新聞を手持って読んでいて、独り言で感心して言うのは、このような新聞紙は当然英国の中でも屈指であろう。

석양은, 염々하고, 만목은, 울충하야, 수간두옥이, 운영하되, 괴화이초가, 산만하야 쓸암해, 가득하고, 세죽념을, 빗기것어, 서안이정제하되, 나이, 오십여나된, 신스가 슈염이, 희씩희씩하고, 괴골이준슈하며, 안식이훈후하야, 즈익십이, 미목간에, 은연히 게뵈이니, 당세에, 유명하, 화공이라도, 그화괴와, 익용을방불히, 그리기어려울너라.

그신스노, 범국파려, 의학스좌선군인디, 영국발되돈부에, 와서, 위싱스를연구하니, 이집은, 그신스의, 숙식하느려관이라.

이적좌선군이, 대리신문하 장을들고보다가, 서안에노으며, 혼즈말로, 탄복하느말이 이러하, 신문지노, 응당영국중에도, 몇직안가리로다.¹⁸

【森田訳】は佐善の独り言で始まるが、【李海潮訳】は「夕焼は炎々とし万木は鬱蒼たるに、數間斗屋は隠映であり、奇花異草が爛漫と庭の前にぎっしりとしている。細竹簾は開けてあり、書案は整齊であるが」という情景描写で始まる。当時文壇の主流であった新小説特有の文体で情景描写を追加しているのである。このような情景描写は冒頭だけではなく、作品全体にかけて至る所で散見される。以下の引用は、仁毘の一次攻撃が計算錯誤で失敗した後、また来る二次攻撃に対しての準備に慌たしい長寿村の姿を描写する場面である。

【森田訳】

今迄は太平無事にして和楽の氣象を現はしたる左しもえ愛度き長寿村も今は大砲鑄造の事を始め戦争の用意トリドリにて太と悲惨にして穏やかならぬ有様とそ一変しける¹⁹

¹⁷ 森田思軒述訳『鉄世界』（東京：集成社，1887.9），pp.1-2.

¹⁸ 李海潮訳『科学小説鉄世界』（京城：匯東書簡，1908），p.1.

¹⁹ 森田思軒述訳『鉄世界』（東京：集成社，1887.9），p.153.

【李海潮訳】

悲しいなあ・・・太平無事で和気隆々である故、ただ慈善心と親愛の情で困難を知らずにいた長寿村が、一朝に大砲を作る、長槍の手入れをする、無数な殺人器具を準備する、などで東奔西走し、昼夜慌忙とするに、天下に悲惨でものさわがしいことこの上なし。

슬프다 틱평무스하야, 화괴릉々하고, 혼갓자선심과, 친이정으로, 곤란을모르든장수촌이, 일조에, 대포를짓는다, 장창을치인다, 무슈흔살인구를, 준비하노라, 동서분주하고, ज्या황망하네, 탄하의비참하고, 슈란흠이, 이에서더홀즈잇스리오²⁰

【李海潮訳】は「悲しいなあ」と、語り手が直接顔を出して感情を吐露し、悲惨な心境をより具体的に描写していることが確認できる。

以上のように、【李海潮訳】は【森田訳】と比べれば、善悪対比がはっきりとした図式的人物描写、主要局面における語り手の感傷の吐露による情景描写などによって、確かにフランスとドイツの対決構図は強化されていると認められる。ところが、このような善悪対決や民族対立の構図のために感傷的記述が増加したのにもかかわらず、【李海潮訳】は、200頁の【森田訳】から100頁に縮訳されている。

そうだとすれば、はたしてどの部分を削除して半分の分量に縮んだのであろうか。それは他ならぬ、ジュール・ヴェルヌの科学小説の一番重要で本質的個性である、科学理論や知識に基づいた緻密で客観的な描写の部分である。以下は仁毘の一次攻撃が計算錯誤で失敗する場面で、作品のクライマックスにあたる部分である。

【森田訳】

既にして一分を過くる程に忽ち鍊鉄村の方よりしておおきやかなる黒き団塊のシュート響きを為しながら仰き視居たる佐善馬克等の頭上を横きりて何処ともなく飛び行けり馬克は大口開きて打笑ひ「①是は又た羨ましき飛行かなあの速力に飛び行かば丸い空氣の層を突き抜け天外に飛び去るへければ再び地上に落來ることはあらず永久永劫独り宙を彷徨うへし」と云ふうち②二分を経てゴロゴロと物凄き響きの頭上を鳴りわたれたるは是今ま飛行ける烈丸の発砲の時の声にして砲丸は一時間四百五十英里(凡そ百八十里余)の割合にて飛行きし故聲は迥かに之に後れ砲丸の通りしより一分五三秒を経て緩かに此に達せるなり²¹

【李海潮訳】

山の頂上に上って、一分が過ぎると忽然と鍊鉄村から丸く大きい塊が一つシュッと飛んで来るかと思ったら、すでに佐善の頭の上を通過して過ぎていくに、馬克が仰ぎ見ながら、

フフン、フフン、不思議だな。①この世の中の大盗が汝を羨ましがるべし。仁毘の百万ウォンの黄金を、盗んではあのように身軽く、九万里長天に飛んでいくと

²⁰ 李海潮訳『科学小説鉄世界』(京城：匯東書簡，1908)，p.76.

²¹ 森田思軒述訳『鉄世界』(東京：集成社，1887.9)，p.146.

は。

というに、佐善と常議員が皆でけらけら笑ってから降りてきたが、②また二分が経て、雷のようにゴロゴロという音するに、これは、弾丸が飛んで行った後、大砲が響く音である。

산상봉에, 방장올나서며, 흥분중이, 마져되는데, 흥연런털촌에서, 코고동근, 흥덩열이, 너분히계셔너오며, 발서좌선의, 머리우호로, 흥가지나가는지라, 마극이, 쳐다보며,

허々, 허々, 묘하다, ① 이세상에, 큰도적이, 너를부러히갸다, 인비의빅만원황금을, 흠쳐가지고, 더러케몹이가비어히, 구만리장터으로, 나라가나.

흥는소리에, 좌선과상의원이, 모도팔々웃고, 님러오니, ② 다시두분시간이되며, 텨동갸치, 우루루, 우루루, 흥는소리나니, 이탄환빠진후, 대포울니는소리러라. ²²

【森田訳】の①「是は~永久永劫独り宙を彷徨うへし」の部分は今日の人工衛星の原理を説明するのであり、②「二分を経て~一分五三秒を経て緩かに此に達せるなり」は音や速度、時間の関係に関する科学知識を以てストーリーを導いていくところである。これは作品全体の構図である佐善と仁昆との対決の行方が分かる一番重要な局面だと言える。それだけ、【森田訳】では仁昆の計画の失敗の様子を具体的かつ詳しく科学的に描写することにより、作品のリアリティを確保している。しかし、【李海潮訳】では①の人工衛星の原理は跡形なく完全に削除されており、②の科学的原理もごく簡単に単純化されて述べられているだけである。

以上のように、【李海潮訳】では科学的理論・知識によるメカニズムの説明はごく簡略化されたり削除されたりしており、【森田訳】の200頁が100頁に縮約されたのはほとんどこの部分であることが分かる。要するに【李海潮訳】は「科学小説」という角書をつけてはいるが、肝心の科学的想像力を刺激するという科学小説の本質は捨象してしまう結果をもたらしたと言える。

4 結び

東アジア三国は西欧文明の受容を通し富国強兵を遂げようとし、科学小説は西欧文明の受容の一環として関心の的になった。韓国も日本や中国を経た重訳の形ではあったが、比較的早い時期から科学小説を翻訳して受容した。本論文では韓国最初の完訳科学小説である李海潮の『科学小説鉄世界』を中心にその様相を検討してみた。

李海潮の『科学小説鉄世界』は科学小説を標榜した翻訳であったにも関わらず、国権喪失の危機に処した朝鮮の運命という状況の下で、民族啓蒙という時代的要請の圧力に耐えられず、科学小説を科学小説として翻訳できず民族啓蒙に重点を置いた啓蒙小説として

²² 李海潮訳『科学小説鉄世界』（京城：匯東書簡，1908），p.73.

翻訳した。ところが、ジュール・ヴェルヌの作品の科学小説としての真面目は、ほかならぬ科学的理論・知識によるメカニズムの説明にあり、森田もそのような特徴は充実に翻訳している。このような森田の翻訳を経たのにも関わらず、李海潮の『科学小説鉄世界』では科学的理論や知識で事件を展開することによって人間の想像力を刺激するという科学小説の一番重要な側面が、民族独立への自覚という啓蒙という強迫によって捨象されてしまう結果になったのである。

このような李海潮の翻訳の限界は、単に李海潮という作家個人の限界と言うよりは、韓国の文壇の状況—国権喪失の危機に処して西洋の歴史や政治、偉人伝記などで国民に愛国・自主独立思想を吹き込む文学が主流となっていた愛国啓蒙期という事実、推理や科学、恋愛小説を正統から外れた異端と見做そうとする1920年代の写実主義文学の雰囲気、科学小説を児童文学の一部と見る風土、まだ科学知識や理論を理解して科学小説を読める読者層の不在など—の問題として捉えるのが妥当であろう。それから、このような李海潮の翻訳が抱えていた限界は、以後の創作科学小説の流れにも影響したと言える。すなわち、このような限界は、あまり遅くない時期に翻訳を通じて科学小説を経験したにもかかわらず、なぜ小説家金東仁の「K博士の研究(K박사의 연구)」(『新小説』1929.12)と金慈恵の書いたコント「ラジウム(라듐)」(『東亜日報』1933)以外には本格的科学小説の創作は為されておらず、1965年のムン・ユンソンの「完全社会」を待たざるを得なかったのであろうか、韓国における自生的創作科学小説の不尽の原因はどこにあるのか、という問いへの一つの答えになるのではないかとと思われる。

参考文献(Bibliography)

- 森田文蔵(=思軒)(1887)「凡例三則」『鉄世界』, 東京: 集成社, Morita, Shiken(1887) *Hanreisansoku: Testusekai*, Tokyo: Syuseisya.
- 김병철(1975)『한국근대번역문학사연구』, 서울: 을유문화사, Kim, Byeongcheol(1975) *Hanguk Gundae Munhaksu Yeongu*, Seoul: Ulyumunhwasa.
- 김종욱(2002)『한국현대문학과 경계의 상상력』, 서울: 역락, pp.239-240, Kim, Jonguk(2002) *Hanguk Hyeondae Munhwa Kyeonggyeui Sangsangryeok*, Seoul: Yeokrak, pp.239-240.
- 김재국(2000)「한국과학소설의 현황」, 대중문학연구회 편『과학소설이란 무엇인가?』, 서울: 국학자료원, p.97, Kim, Jaekuk(2000) *Hanguk Gwaha Soseolui Hyeonhwang: Kwaha Soseoliran Mueosinga*, ed. Daejungmunhakeonghui, Seoul: Gukhakjaryowon, p.97.
- 유철상(2000)「번역을 통한 '자미'와 '영향'의 재창조-이해조의『鉄世界』론-」, 이응남 외『한국 개화기소설 연구』, 서울: 태학사, p.216, Yu, Cheolsang(2000) *Beonyeogul Tonghan Jamiwa Yeonghyangui Jaechangjio-Lee, Haejoui Cheolsaegyeron: Hanguk Gaehwagi Soseol Yeongu*, etc. Lee, Yongnam, Seoul: Taehaksa, p.216.
- 이응남(1987)『이해조와 그의 작품세계』, 서울: 동성사, Lee, Yongnam(1987) *Lee, Haejowa Gui Jakpumsegye*, Seoul: Dongseongsa.
- 천홍슈(陳宏淑)(2018)「철 베른에서 바오티엔샤오(包天笑)까지—『철세계(鉄世界)』의 중역사—」, 김효순 편

- 『동아시아의 일본어문학과 문화의 번역, 번역의 문화』, 서울 : 역락, Cheon, Hongsyu(2018) Jules Verne-eseo Baotiensyao-kaji—Cheolseggyeui Jungyeoksa— : Dongasiaui Ilboneo Munhakwa Munhwau Beonyeok, Beonyeokui Munhwa, ed. Kim, Hyosun, ed. Seoul : Yedkrak
- Jules Vern(1887) 『鉄世界』, 森田文蔵 (=思軒), 東京 : 集成社. Jules Vern(1887) *Tesusekai*, trans. Morita, shiken, Tokyo : Syuseisya.
- Jules Vern(2005) 『인도왕비의 유산』, 김석희 역, 서울 : 열림원. Jules Verne(2005) *Indo Wangbiui Yusan*, trans. Kim Seokhi, Seoul : Yedlimwon.
- Jules Vern(1908) 『과학소설 철세계』, 이해조 역, 경성 : 회동서관. Jules Verne(1908) *Gwaha Soseol Cheolseggye*, trans. Lee, Haejo, Gyeongseong : Hwoidongseogwan.